

平成 27 年度第 7 回小学校ゼミナール記録（八島班）

2016 年 3 月 18 日（金）

於：広島大学附属小学校

参加者：八島（授業者）・西・岡川・ANTONIO・武岡

1. 協議事項

広島大学附属小学校研究大会の振り返り

小学校算数科第 1 学年「かずしらべ」の授業反省

2. 協議内容

2 月 5 日の広島大学附属小学校研究大会で実施された、小学校第 1 学年「かずしらべ」の授業について反省を行った。授業は、「よく売れる」クッキーを調べるために、必要な情報を集めて絵グラフをつくり、その特徴や傾向を読むことができるようにすることを指導目標として行われた。事前の授業検討の甲斐もあり、概ね予定通りに授業を進めることができた。以下、今回の反省内容について述べる。

まず、3 つの情報の中から必要なものを選ばせる場面では、明らかに関係のない「お店の人の年齢」を入れ、それが関係のない理由を言わせたことで、「1 番よく売れるクッキーを調べる」という目的がより明確になり、児童たちもそれを意識して活動に参加できたように思う。選んだ情報を整理し絵グラフに表す場面に移ると、この問題場面と既習事項がつながり、教師の誘導なしに児童たちから絵グラフで整理すればよいということが出されたことはよかったと言える。

続いて、児童たちが作成した絵グラフの読み取りをさせる場面では、数の「多い」「少ない」「同じ」については読むことができたようであった。しかし、残念ながら、「～個で同じ」といった発言が現れなかったことから、数値を根拠として比較することができていたとは言にくい。

最終的に、いちごとレモンのクッキーのどちらが「よく売れた」のか児童たちが判断する場面においては、根拠との整合性がとれていれば答えはどちらでもよい。実際には、この場面の直前の活動から得た結果の影響を強く受けたようで、児童の記述を見る限り、「1 番多く売れた日の数の合計」ではなく、「売れた数の合計」の多い方が「1 番よく売れた」という結論に偏ってしまっている。そのため授業では、課題のオープンエンド性を生かした議論に至らなかった。「売れた数の合計」から判断する児童だけでなく、「1 番多く売れた日の数の合計」から判断する児童も現れるようにするためには、どのように誘導すればよかったのかというのが、この授業での最大の課題となった。この解決策としては、例えば、「売れた数の合計」から答えを「レモン」と判断した児童が多く現れた時点で、教師が「なぜ、1 番多く売れた日の数の合計ではなく、売れた数の合計で判断したのか」と問いかけてみてはどうだったのかという案が出された。

（文責：武岡翔平・岡川健太）